

## 4. フリーディスカッション

### (1) グループ分け

学生団体の発表を聞きながら赤い付箋に「おもしろかったこと」、青い付箋に「参考になったこと」を書いてもらったと思います。自分で書いた付箋を封筒の上に貼ってください。

今から10個のグループに分かれてもらいますが、分かれてもらうため先生方にテーマを書いた紙を持って前に立っていただきます。

なぜ皆さんが地域で活動するのか、なぜ地域に入りたいか、望んで行きたいか、サークルに入っているのか、理由ごとに分かれて座ってほしいです。

こちらの方でほしい理由をあげてみたので、意見が近いなあと思うところ、ちょっと考えてください。

「経験を積みたい」、「就活のため」、「地域の人に頼りにされるのはうれしい」、「キャリアアップのため」、「仲間がほしい」、「思い出をつくりたい」、「何か活動したい」、「単位がもらえる」、「田舎がすきだ」、自分に該当するものほしい10人ぐらいで分けてください。



それではこのグループで一つ活動します。毎年この連携フォーラムではスイーツを作っています。それを順番に取りに行く権利を争奪します。今、配っているA4の紙を使ってゲームをします。A4の紙を塔にして床から椅子の高さまで、組み上げてください。みんなで考えて構造物を作ってください。切っても折り曲げても破いてもいいです。一番早く椅子の高さまで到達したグループの先生にピンクの旗をあげてもらいます。そこからデザートを取りに行くことができます。



### (2) スイーツ

スイーツとあわせてチラシを見て頂いていると思いますが、これまでに大学連携フォーラムをきっかけに4種類のスイーツを作ってきました。

まず最初に、「篠山」という抹茶を使ったスイーツ。このスイーツは篠山市の「ささらい」というお店の藤岡さんに作って頂いています。

2012年には「藤稔」というブドウを使って、ババロアにしたもの。

次は「香り山梨」という、とてもかわった種類の梨を使ってジェラートにしたアイス、これを青垣町の関西大学佐治スタジオでいただきました。

去年はカキマージュという干し柿をデザートにしたもの。

今年は、先ほど学生団体の紹介がありました、篠山市で活動する「にしき恋」の皆さんが作った枝豆を使ったスイーツとなっています。ミルクと生クリーム、オーガニックシュガーと卵、ココナッツとリキュール、ノーオイル、夏に採れた枝豆を冷凍保存したのを使っています。



### (3) 学生団体の発表を聞いて面白かったこと、参考になったこと

それでは、各グループで自己紹介してください。

先程の他の学生団体の活動報告を聞いて、赤い付箋には「おもしろかった事」、青い付箋には「参考になると思った事」を書いてもらいましたが、各班でまとめていってください。共有してもらえればと思います。

#### (3-1) グループごとの発表

- ・「にしき恋」大学のない篠山市の子供にとって大学生という存在自体が新鮮というのは、自分たちは当たり前のようにまわりに大学生がいるけど、そういう環境だという視点も確かにそうだなと思った。自分たちの未来の姿というか、篠山市の子供が知ることか、身近にいなかったら知ることができないから、そういうために篠山市に行くことは良いことだと思った。(関学大)
- ・「にしき恋」と「里山プロモーションチーム」の話の中で、地域の要望に対して、学生ならではの視点で問題を解決していくところが参考になった。(柏原高校)
- ・団体ごとに個性とかツールがあって、その地域の個性を生かすお米をお祭りで使ったり、鹿肉を調理したり、その活動にきちんと軸が通っているというのが、おもしろい事で、その活動が繰り返す計画されていることが、大事ではないか、という結論になった。(立命館大)



清野先生：繰り返すというのは難しい課題なんです。

- ・大学生とその地域の子供との関係ですが、子供にとって大学生が新鮮というか、大学生は特別というか、活動をたくさんしているので、年配の方も元気で活動されるのも大事だが、それを支えるのが大学生ではないかと思いました。映像ですが、京都大学の映像が魅力的で発表の内容も大事だが、映像を見て興味を持ってもらうことが大事だと思いました。



清野先生：京大チームの映像は毎回すごくいいなあと思うのですが、すごくお金がかかっているのですか？

- ・誰でも安くできます。(京大)

・参考になった事は、京都大学の里山プロモーションチーム。私達はお祭りの活動をしているので、それも映像化したらいい感じになるんじゃないかと思うので、参考にさせていただきます。おもしろかった事は、Clownのツリーハウスです。子供のころの木登りを思い出して、大人も子供も楽しめる良い企画だと思いました。(神戸大)



・神戸大学の「にしき恋」が参考になった。毎週土日の地域を訪れ、地域の方と密着して活動していく事で、地域の方と離れずに信頼関係が築きあげられているので、そういう点が参考になった。



**清野先生**：学校の中では、篠山に行きすぎて怒られるというのがあるのですが、地域に密着することはひとつのやり方だと思います。

・立命館ツリーハウス制作から解体まで自分達でやろうとするところが良いと思った。



**清野先生**：ツリー評価されていますね。活動していてもなかなか誰からも誉められないのですが、その中でお互い評価するものなかなか良いことなのかと思います。

・久下カフェのイベントは若者向けのイベントを行ったが、年寄りも参加するから「えー」と思ったが、年寄りがたくさん参加したら皆喜ぶかな、それとも嫌になるかなと、思った。若者向けのイベントではあるが、実は年寄り向けのイベントなんだと思った。



・関学のハピネスキッズステーションが面白いと思った。子育て世代に対してとても良いものだったと思った。京大が参考になった。昔撮影したビデオから復活させて引き継いでいこうということは、いいアイデアだと参考になった。(篠山鳳鳴高校)

#### (4) 学生が地域にかかわる利点とは？

次は難しい課題に行きます。先程テーマ毎に分かれてもらいましたが、次はずばり「学生である皆さんが地域に関わる利点」。なぜ自分達の世代が地域に関わる、地域で活動する、そういう意義があると考えているか、というところをあげてもらいたいと思います。

大人の方の方は、1つのグループにまとまってもらって、地域のおじさんにとって学生だから、こういう理由で入ってほしいんだ、学生だからこういう効果が有るんだということをまとめてみたいと思います。

##### (4-1) グループごとの発表

・いい意味でも悪い意味でも、学生は無知、まっさらな状態・存在だからいいのかなというのがあって、地域の方が思いつかないような新しい考えも利益とかなしに社会人だと利益を考えて行動しまいがちだが、学生はそんなところまで考えをもっていないので、奇抜な、それ本当にやって大丈夫なのというような意見も出せたりする。そういうところは学生が地域に関わる利点。奇抜な発想、地域の方が思いつかないような新しい考え、新しい世界、新しい意見を与えることができるかなという意見がありました。学生にとっての利点は、やりたい事が出来易い環境にあるということなのです。都市部では何かしようと思って



いても、やれ法律だ、やれこういう決まりだと、市によって制約がいろいろあってやりたいことができない。でも地域だとかこういうことがやりたいと投げかけると、「それいいね」と応えてくれる環境が地域の方が動きやすい。学生にとってもやりやすい環境があるというところに利点があると考えました。

最後に地域にとっての利点というところですが、これははずばり労働力の向上や移住をして地域を若い力で潤してくれるところに尽きると考えました。地域の方も学生や若い世代が来ることによって、無知な学生に改めて伝統とか自分の地域のことを教える時に地域がもつ魅力を再確認することもできると考えました。この班の話でひとつ重要なことが、自分が年をとった時に同じように若い子が来てくれたらうれしいね、そういう子が来なかったら、逆にさみしいなと思うという話がありました

- ・学生が地域に入るのが先だと思うが、その時に学生はある意味で、責任なく地域に入り自分たちのやりたいことを実践していく地域にあると思うんです。地域によって自分たちが活動していく中で地域の方々と仲良くなったり知ることによって、地域の方から学生に働きかけがあったり、地域の方各世代と交流することによって、地域の方と同志をつなげる場になっていく。そして地域の方の要望に応える形で、学生がプロジェクトを打ち出すという地域と学生の相乗効果が見込めると考えます。



**清野先生:**学生がそういう媒介することはどう思いますか？他の若い仕事している人でも地域と相乗効果を生み出すことができると思いますか？それは学生じゃないとできないんですか？

- ・学生のメリットとして時間があって、お金も多少あって、何なら体力もある学生が動きやすいのかという気がします。

**清野先生:**特に時間を使おうと思えば、できるという立場ということですね。



- ・学生の利点として、社会が地域に行こうとすると人を集めることが難しいが、大学というコミュニティーに属する大学生はグループが作りやすく地域に行きやすい。地域の利点、都市部から地域に行き、地域の経験を都市部に持ち帰ることで、地域の知名度があがる、長い間生きていろいろなジャンルをもって、考え方一方向しか考えられないというところが、学生は生まれて間もなくまだピュアなのでいろんな意見が出てくる。

**清野先生:**皆さんより、もっと若い高校生がもっと柔軟ということになりますね。



- ・学生の利点、イベント、ボランティア、農業に参加して、高齢者、地域の方と関わっていく中で、大人の地域の意見を理解して、私達が社会に出て仕事をする時に必要なスキルを養ったり、私達が次世代を担っていく存在なので、地域のことをしっかり考え地域の現状を理解していくことで、地域の未来がよりよいものになっていく。
- ・地域の利点、農業をやっている人が減っていることなど、地域のことをたくさんの人に知ってもらい、若い人に来てもらい広めてもらって、今どうなっているのか、そして農業の大切さや良さを知って広めて地域活性を若い人にしてもらうことが利点と考えた。(柏原高校)



**清野先生:**あなたみたいな人がいっぱいいるといい考えになるんだけど、ピュアなそんな人ばかりいないので、世の中大変なことになっているんだけど、その気持ちを忘れずに大きくなってほしいと思います。

・学生だけで話し合っているのではなく、地域の人に関わることで学生だけでは出ないアイデアが出ることが利点だと考える。学生が地域の人と関わることで、それが自分が今住んでいる現状とかにその視点が役立つという意見も出た。



・学生・学生が地域と関わることで、学生自身の地元を考え直すきっかけとなったり、地域と関わることで、IターンやUターンを考えるきっかけになったりする。  
地域・学生同士が地域の情報を伝えることで、その地域の情勢を知ってもらったり、学生が関わることで話題性になったりする点



**清野先生**：学生が話題にするとなぜ話題が拡散するのでしょうか、他にも情報発信しているおじさん、おばさんがいると思いますが、それを学生がすることの違いは何かありますか？ 学生がする意味とは何なのか、ということをしごく考えていたので、学生がツイッターや Facebook に書くことで、普通に人が同じことをやることと違う何かがあるのかと思い、お聞きしました。

・普通、地方に来た人はただ自然を見たりで終わってしまうが、単位がもらえたり学生団体として行くことは、きっかけは何か与えられて自ら何かをするということで、地域の人と関わるというのが利点、関わることで価値が生まれていいと思う。普通に行く人よりも関わる方がいいと思って、私達に関わることによって、地域の人も関わったということでお互いにとっていいかと思った。



**清野先生**：この班で話をするときには、先生はなぜ学生を地域に連れていくかを投げかけられたのですが、あとで、先生方おひとりおひとりにコメント頂きますので、その時に関連して頂ければと思います。



・学生にとって利点とは、経験、いろんなことに挑戦できること、祭りのこと、いろんな年齢の人と交流できるので、お年寄りの経験と学べる。地域の利点は、都市部の人と地域の人、若い人、年寄りの人、留学生、いろんな人が関わるので、いいことだと思う。



・非常に国際的でしたので、留学生の人に日本語で発表してもらおうと、ぎりぎりまで「嫌だ、嫌だ」と言われたのですが、実際にはしっかりと発表してもらえてすごく良かったと思います。大きくまとめて実際には色々出たんですけど、学生にとっての利点は大きく経験、地域にとっては交流というところで、今回せっかくこれだけ留学生の方がいたので、学生にとって、というより留学生にとってというところで、少し話させてもらいます。



学生にとっては地域の伝統文化を知る機会になる。自分が実際に住んでいるだけではわからないところまで知れる、そこをしてあげていたというのが特徴的だったと思います。

地域にとっての利点のところも同様で留学生ということで、かなりいろんな国の方が来ています。異文化交流ともいえるような形が進んでいっている。大学の国際化をきっかけに、そういったところへの波及もあるんじゃないかというところが今回出てきたのかなというところで、この班は報告以上とさせていただきます。

**清野先生**：すごく日本語が流暢だったので、長く日本語を勉強されているのかと思ったのですが、そんなことはないのですか？ 山本先生が留学生の皆さんを連れて来られているのですかね。また、その心の内を後で聞かないといけま

せんね。国際化が進む今の世の中においては、留学生の方が気軽に地域に入る機会を持つことは、私達はすごく重要ではないかと思っています。私達もこういう機会をつくってもらえたら海外にも行きたいと思います。

最後は地域班ですね。地域の人、行政の人、県も入っていただきました。

- ・意見は地域にとっての利点が主ですが、最初に学生にとっての利点は、地域の課題を今まで学んできたことをどう活かすかという時に地域の課題を知って学んできたことを活かすような事を考えていただけたところが利点ではないかと大人たちは考えていると理解してください。



それは知ってもら、情報発信してもら、問題点、課題を知ってもらという学生の意見もありましたので、一致しているところだと思いました。たぶん高齢者にとっては祭りとか伝統文化を語ると先ほどの留学生の利点もありましたとおり、自分の息子が聞かない昔話を若い人が聞いてくれるというのは、非常に有難いことであると思っています。中には学生を見るだけで新鮮で元気にしてくれると、歩いているだけで心地よい、挨拶までしてくれたら、なお心地よいという方もいらっしゃいましたので、地域にとってはそういう感覚でみているんだと理解してください。

議論の中で、経験重視の大人たちの視点、その中で人間関係みたいなきがらみがないので、思ったことをズバツと言ってくれる、そういったところが非常に魅力であると、新しい技術、ハイテク技術、スマホを持っていても使いこなしていない人が多いので、そういう意味では新しい情報発信源のツールを使いこなす技術、映像とかは非常に期待しているという声がありました。

ただ今日、京大の発表を見ていまして、あれだけ映像技術を持っているところとか、今年の新聞だったというところが考えさせられるところでありまして、つまり情報発信というのは、何を情報発信するかというところで、今までの全ての発信源をもう一回見直して、一番良いものを選択せよということを発表の中で語っていると思ったので、苦手な部分はハイテク技術の部分ですが、そういったところも耐えると、同時に何を発信するかで経験を活かして、一緒に考えていくことが重要なことだと思いました。

あと市としては、県民局から有難い言葉を頂きまして、丹波地域は学生を受け入れる適地である。1時間で来られる。これはこの事業が継続するという意味をもっている訳でありまして、助成は継続してもらえると自信を持ちまして、非常に有難く受け止めました。

それから、受け入れ体制が整っているところが進むんだということも県民局の方がおっしゃっていましたので、篠山市、丹波市ともにこのあたりをしっかりと整えたいと思います。

それから4年の卒業サイクルというのがありますので、そのあたりの維持性を考えていけないといけないという声もありました。

最後に今回発表を聞いていまして「高校生が非常にまじめだ」ということが印象に残っています。大学生は楽しもうというのがあったのですが、高校生は地元、ふるさとですよ。で、大学生の大半はよそ者の視点で丹波を訪れ、このあたりを考えますと、地域としても地元のふるさととしている学生の使い方と高校生みたいな学生視点が多い、意外と楽しみながらエンジョイするような形で交流してくれる大学生みたいなことを視点も少し考えながら、使い分けみたいなことも地域として意識しないといけないのかなと思いました。

**清野先生**：大分まとめていただいて、それぞれの発表のエッセンスも引いていただいたのですが、経験でありそれをうまく地域が活用する。今までのやり方だけではなくて、もう一度見直す必要性も地域に求めているとそういったことが挙げられていて、その通りだと思いました。

## 学生として地域とかかわる利点とは？ なぜ地域にかかわっていますか？

**地域+行政** → 丹波地域は学生受け入れの適地

**学生**

- ・今まで学んでいたことを活かせる。
- ・地域の経験が自分の住んでいるところに役立つ  
(自分の地域で考えるきっかけ)
- ・やりたいことができる！(挑戦できる)
- ・グループを作りやすい。→多世代と交流できる。
- ・単位がもらえることに加え、プラスアルファ→何らか得るものがある。
- ・柔軟な考え、多様な考え
- ・社会に出て役立つ
- ・次世代を担う準備
- ・I、Jターンを考えるきっかけ
- ・学生にしかできない考え
- ・地域からの働きかけの媒介ができる。(時間がある。)

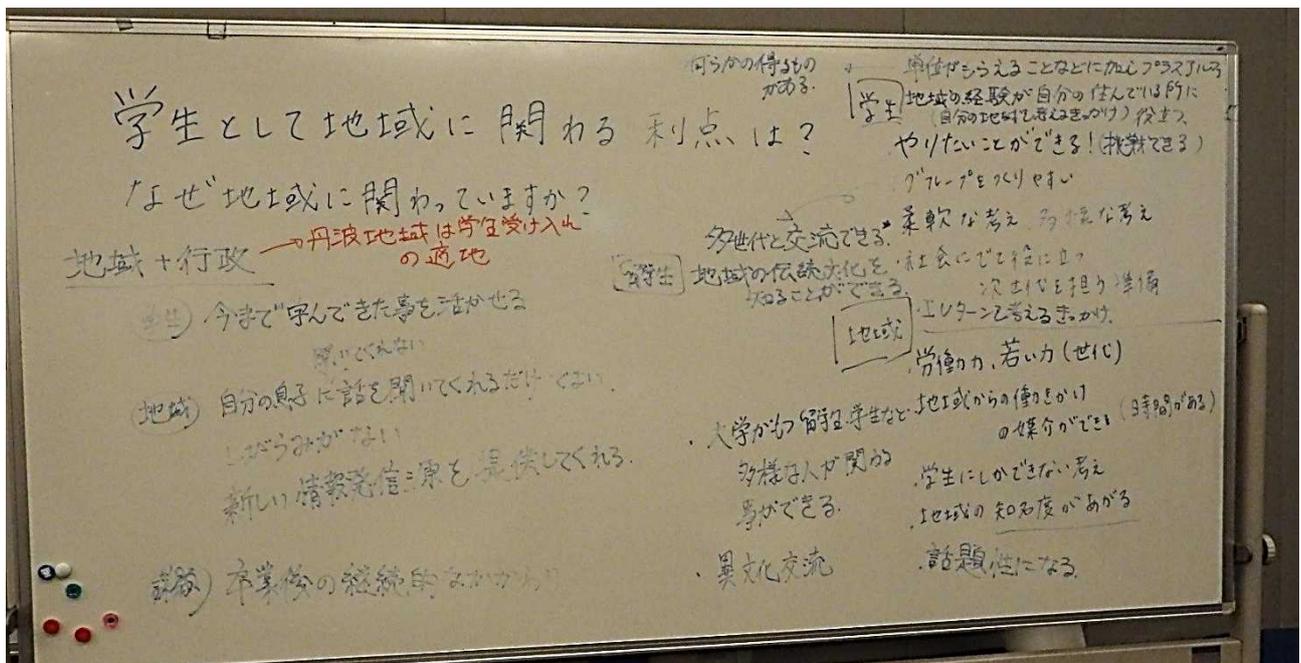
**留学生**

- ・地域の伝統文化を知ることができる。
- ・異文化交流

**地域**

- ・自分の息子が聞いてくれない話を聞いてくれる。
- ・しがらみがない。
- ・新しい発信源 (Facebook、Youtube など) を提供してくれる。
- ・労働力 若い力 (世代)
- ・地域の知名度が上がる。
- ・話題性がある。
- ・大学が持つ留学生、学生など多様な人が関わることができる。

**課題** 卒業後の継続的なかわり



5. 神戸大学と地元レストランが共同開発した試作品について

過去に作られたスイーツ



2011



茶々山



藤稔のババロア



香り山梨のジェラート

柿まーじゅ

Special thanks



これは、丹波地域大学連携フォーラムの前、神戸大学が篠山市と全学協定を締結したことを記念して製作されました。上にのっているチョコレートは、農場のキャバ米を使用し、下のケーキには、丹波茶を練りこみました。ささらは菓100年以上の古民家を改修してオープン。



その改修とともに発見された史料から、その古民家が「丹波茶を扱う商屋敷」であることがわかったため、丹波茶を使用したスイーツを作ることになったのです。

\*1...神戸大学食糧資源教育センター \*2...神戸大学人文科学研究科の研究員です。

神戸大学の農場で生産しているブドウ（藤稔）を使った美味しいスイーツを食べてみたい。これが、製作の始まりでした。糖度15度の藤稔を贅沢に使ったムースは、下のババロアの濃厚なソースとして、大きなインパクトを与えてくれました。またあのスイーツを食べたいなあと思うことがよくあります。

神戸大学の農場でジーンパンクとして保存している梨（ヤマナシ）のなかで、加工先が見つからず大量に果実が余っていた品種を使って、ジェラートを製作しました。空気にふれると赤く変色してしまう特徴を生かし、ほんのりピンクに色づいたジェラートは、この品種のもつ豊かな香りと相まって唯一無二の商品だなど、実感しました。ささらいでもしばらくお店のメニューとして扱っていただいていたようです。

篠山市畑地区で2013年から実施している「さる×はた合戦」という、獣害対策イベントの一環で入手した柿を、干し柿にしました。その干し柿を使って何かとおきのおデザートが作れないか...そんななかで生まれたのが「柿まーじゅ」です。スプーンですくうと綺麗なオレンジ色のフロマージュがととも美しかったです。干し柿を若い人に食べてもらえように、と思って作られたスイーツは、フォーラムでもっとも好評でした！

藤岡敏夫さん（里山和菓料理ささらい）と、片山寛則先生をはじめとした神戸大学食糧資源教育研究センターの協力なしにはこのスイーツたちが生まれ得たとはありませんでした。また、丹波県民局の皆様は柔軟な対応で毎年製作に協力してくださいました。心より感謝申し上げます。

丹波地域大学連携フォーラムをきっかけに製作されたスイーツの紹介



2015

枝豆のババロア (Edamame)

丹波地域大学連携フォーラムでは、毎年、大学がおこなう地域貢献活動や教育活動の一環で得られた食材をベースにしたスイーツを製作してきました。それらは単なる「おやつ」ではなく、初めて出会う大学間、学生間のわたがしまりを溶かして繋ぐ、大事な役目を果たしています。



今年、神戸大学の学生サークル「にしき恋」の皆さんが大事に育ててくれた「黒大豆枝豆」をつかったババロア、「エダロア」です。白い層はココナッツで香りづけしたババロアです。今年、フォーラムでお披露目する前に、篠山市の味まつりで販売。用意した160個は早々に完売しました！



2015.12.12 平成27年度丹波地域大学連携フォーラム

## 6. 講評

### 関西学院大学法学部 山下 淳 教授

関西学院大学の山下です。報告の時間が短かったので充分言い足りないというのたぶんあったと思うのですが、聞いていてちょっと気になったのは、決められた時間で言いたいことを全部ちゃんとやる。そのためにちゃんと練習しておくというのは必要だろうと思いました。そういう観点でどうしてもあの学生の報告を聞いてしまったので、中身の善し悪しよりも別のところで善し悪しが私には感じられたというのが一つです。それから二つ目、柏原高校の高校生の報告がとても良かったです。やっぱりちゃんと練習をして時間をかけたものだったんだろうと思います。それに比べてというのは感じましたが、これはきっと準備不足なんだろうと。どうして準備不足なんだというところを学生のみなさんは考えていただきたいというのが二つ目です。それから三つ目ですが、どうして先生は学生を地域に連れて行くのかというのが宿題で出てましたので、私なりの答えを言わないといけないだろうと思います。



法学部の学生を連れてきています。従っていろんなところでなんで法学部の学生がということを言われます。大学の中でも言われます。法学部の他の先生からも言われます。なんでそんなことやっているんだ。私もちょっとどう答えていいのかいつも困るのですが、というのは私自身あるいはそういうことを聞く方自身が、「全然教育効果ない」ということを前提としているから。私もこういう活動自身が教育効果が全くないと思っています。法学部の学生ですから、私としてはこういうことをやってる暇があったら法律の条文の1つをちゃんと覚えて欲しい。まともな法律論ができる人間になって欲しいと思っています。

従って、じゃあなんでこんなことやってるのかという話に戻るのですが、まあそういう法律論、無理なのです。そういう学生もいますから、そういう学生も卒業させないといけませんし、まあもっと言えば社会常識の1つでも身につければいいなあというぐらいのことを考えてやっています。いまどきの法学部っていうのはそういうものだということかもしれませんし、それでも学生がそれなりに楽しんでくれるならいいかなとは思っています。

ただ、最近ちょっと気になるのは、そういう形で学生を連れて行って、学生が楽しんでくれるのはいいのだけれど、それで卒業してしまってそこで忘れてしまっても構わないのだけれど、自分たちが地域で関わっている。あるいは地域の方はそれに対する受け入れの体制をちゃんと整えている。あるいはその学生の活動というのをいろんな形で支援をしてくれている。そういうことに対する責任というのを一方でそろそろ感じて欲しいなと思っています。すなわち自分たちが1年なり2年なりこういう活動をする、それにいろんな形で地域の人を巻き込んでいる。そういう地域の人に対する自分たちの活動の成果というか、そういうものはきちっと返すということを学生のみなさんも気にしていただきたいなと。あまり難しいことを考えないで楽しんでいただいと私は思っています。楽しむ中で学生なりに得るものがあればもっといいし、あるいはそれが地域にとって意味があるものであればいいと思ってますし、恋愛と一緒に私があなを思っているけどあなた私を思っていないというのが普通の恋愛のよくあるパターンですから、学生と地域がお互いに相思相愛である必要はないと思うのですけれども、自分のやったことの成果というか結果というものはきちっと地域にリターンするというのを自覚して、その上で楽しんでもらえればいいかなということでございます。

## 関西大学教育開発支援センター 山本 敏幸 教授

関西大学の山本です。なぜ留学生を関わらせているのっていうところ、その点だけは他所の大学と違うところかと思しますのでそこだけ説明させていただきます。

留学生を連れて来ているっていうのは、ちょっとしたきっかけなのです。留学生をただ呼んでみたら、もの凄く喜んでくれたっていうことです。実は田植えに連れて行くと田んぼの泥の中から上がって来ないんです。いつまで経っても田んぼの中を歩き回っているのです。どうしてなのって言ったら、「こんな気持ちいいの味わったことない」って言うのです。それが香港から来た学生であったり、スイスから来た学生であったり。スイスから来た学生は「私は将来、日本の農家に嫁ぎたい」とまで言い出している、そんな状況なのです。じゃあ、私の授業と一緒に入ってやったらって言って、今やっているんですが、大体 50、60 人の学生が毎学期受講してくれます。そのうちの日本人の学生は 10 人以下です。そんな状況です。「日本人の学生、もっとがんばれよ」って言いたくなります。

その留学生を入れている理由はですね、日本の学生が留学してそういう経験を積むってこと、いろんな文化に触れたり、いろんな価値観に触れたりすることは、なかなか出来ないと思います。ですからそれを日本にいて、しかも自分たちがいつもいる教室に来て学べるんだったら、そんないいことないじゃないってやっているんですけど、なかなか日本人は外国人パワーに押されてだめですね。まず、「英語ができないから」とか。別に英語なんか喋っていないんです。授業の中は。ほとんど日本語で喋っているんですけど、それでも駄目です。それからあと週末田んぼ畑に行って活動するわけですけど、そうすると「週末まで拘束されるのはかなわんな」と言って出てこない。私は交通費は払ってないです。学生に、「自分達の学びなんだから、自分達の交通費で、自己責任で来てよ」って、一番最初の授業で言うんですけど、そうすると出てきてくれます。納得して出てきてくれますので、「15 回の授業のうち最低 3 回ぐらいは来てね」って、いうことは言いますが、そうすると来てくれます。今日もこんなにたくさん来てくれたのは別に強制したわけでもなくて、「今日、こんなことあるから来たらどうですか」って呼びかけて来てくれた生徒たちです。留学生が、違う価値観、違う文化を持っていろんな意見をチーム活動のときに出してくれます。それが日本人がいくら 1,000 人いて話し合ったって出てこないような視点でものを言ってくれたりします。それがやっぱり大きいことかな、っていうところなんです。ですからグローバルっていう本当の意味は、特に高校生のみなさん、決して英語を流暢に話したり、それから外国人に対して褒めてもらうとかそういうのはなくて、やはり自分たちにも返ってくる場所がある。お互いに win-win になるというところかなと思います。



## 関西学院大学総合政策学部 清水 陽子 准教授

関西学院の清水です。言いたいこと、発表に関しては山下先生の方からありましたので、是非来年また来られる方もいらっしやと思いますけれど、しっかりそのあたりは踏まえて報告をお願いしたいと思います。

私の方は授業で関わっています。2 年生を対象とした総合政策学部の都市政策学科というところの教員ですが、都市政策演習という授業なんです。定員 12 人の 2 年生の授業なんですけど、今日は英語の試験と日程が被ってしまって学生が来ることはできなかったんですけど、大半はもしかしらば単位のためにやっているのかもしれませんが、事前登録で 12 人選抜されますので、一応その時点では地域で何かしらしたいと思ってやってくれている学生がほとんどじゃないかなと思います。



一応授業なのでシラバスを書きます。「なぜ外に連れて行くのか」ということを私はお話しするのかなと思うんですけど、まずはやはり学生に地域の課題を見つけて欲しい。そして、それを分析して自分たちなりの何かしら提案をしてもらうというのが、建前上は一番大きな授業の狙いということになっています。ただ私の内心としては、そうやって活動を受け入れてくださる地域があって、してもいいよと言ってくれる、いろんなサポートもあってという中で、どっちかっていうと学生を放し飼いにしたいんです。今の学生は授業が忙しいですし、いろんな単位のことであったりバイトであったり、結構忙しい学生生活の中で、こんな地域もあるんだ、こんなやり方もあるんだということをもっともっと知って欲しい。いろんな経験をしてほしい。もっと視野を広げて欲しいし、いろんな人と関わって欲しい。日頃話さないような年配のおじさんであったり行政の方であったりいろんな人と話をして、それをすべて経験にして社会に出てくれたらいいなというところが、私の個人的な思いとしてはあります。やはりそれをして支えてもらっているのは地域の方、やってもいいよと言ってくれる地域があってということなので、そのあたりは皆さんも、「自分たちは活動させてもらっているんだ」というところにしっかりと感謝をして欲しいなと思っていますし、そうやって受け入れてくださる地域というのは何かしら自分のところの地域で、ある意味、危機感であったりとか課題というもの、もしくは行き詰まり感というものを感じていらっしゃるのではないかなと思いますので、是非、学生のアイデアであったりとかパワーというものをこれから是非どんどん活かしていただけたらと思います。今日はありがとうございました。

## 県立氷上高等学校 山内 英明 教諭

大学の先生に混じりまして、地元といいましてここは、篠山なんですけど隣の丹波市に農業高校があります。農業が3学科と営農科というのと食品加工科というのと生活科があります。あと今日来てくれているんですけど、生徒が4名来ていますが、商業科という4つの学科を持っている学校から来ました、山内と申します。氷上高校という名前は女子バレーでは非常に有名だと思います。ちょっと今年はだめだったんですけど、去年まで34年連続で全国大会に出場していましたので、そういう点では有名なんですけど、それ以外はなかなかマイナーな学校です。



実はここに来させていただいて、こんな話をさせていただくとは思わなかったんですが、実は3年ほど前まで篠山に勤務させていただいておりましたので、ちょっと顔見知りの方もおられて懐かしかったりしながらいるんですけど、農業の学校の農業の職員です。そういう人間が普段は生徒に農業のことを教えているんですけど、たいしたことを教えていません。ただ僕も実は地元が丹波市の人間ですので、こういう機会で大学生の子たちと話をするのはとても楽しいですし、僕なりに考える学生さんにとっての利点とかそんなものを2、3話ができたらと思います。

僕が思うのは、大人は失敗すると怒られます。特に上司が文章の書き方が悪いとか、これ何度でも書き直せとかいろいろ言って、最悪の場合、給料の査定に係ったりするんですけど、大学生は失敗してもたぶん怒られません。まあまあ学生やからって言ってもらえますので、何でも好きなことができることが非常に利点じゃないかなと思います。僕も仕事をしているのですが、先ほどお話ししたとおり農業の職員ですので、執務室内でする仕事は非常に嫌です。外に行って遊んでいるほうが好きなんですけれど、そういう意味で大学生の今の立場を上手いこと使って、勉強してもらえたらと思います。

地域の人間、一人間としますと、正直言うと何年か前に流行っていたんですけど「定年帰農」というのがあるんです。つまり定年されてから農業するために田舎に帰って来られるという方がおられますし、今もおられます。この中にもひよっとしたらおられるかもしれませんが、そういう方を前に言うと怒られてしまいますが、年寄りがいくら帰ってきてもらっても地元の若い人からしたらちょっと困るなど。困ることばかりではないんですけど、いろいろ教を請うことも多いんですけど。何が困るっていうと子供が増えないんです。多分、学生の方は20代の方がほとんどですので、もう10年ほどして子供を持たれるようになってそういった方が田舎に帰ってきていただければ、僕はとても嬉しいです。P

TAの仕事もだいぶ減りますし、地元の仕事も減りますので、大変有り難い。やっぱりあの田舎に人が帰ってきて若い人がいて子供が増えていくと、いくら年寄りの人でも顔がニヤニヤしてきますので、地元の人間としてはやはり年寄りの方も大事なんですけど、やはり若い人が帰って来てくれてとか。よそ者でもどんな人でもいいんですけど、若い人が入ってきてくれて、平均年齢が下がっていったりして子供の声が聞こえるっていうのは、僕も子供はいますけれどやっぱり地元の人間としては大変嬉しいです。こういう機会がよく言わせてもらったり、他の方も言われるとは思んですけど、是非ともこれを機会に篠山市ですとか丹波市とかに定住してもらってですね、子供さんを産んでいただいて、地元をいろんな意味で潤していただけたら大変ありがたいなと思います。

また今後機会がありましたら、よろしく願います。

## 神戸山手大学現代社会学部 高根沢 均 准教授

神戸山手大学の高根沢と申します。もう既にたくさんの先生方がいろんな話をされて、僕の方から付け加えることはあまりないんですけど、今日本当に皆すごい活気にあふれるこういうセッションがあって、びっくりしたんですね。僕は授業を大学でやっていると、90分もたせるのが大変だっていう話なんですけど、今日は、気付けば3時間ですからね。すごいことだと思って。

色々意見が出て、学生が色々なことにチャレンジさせてもらっているこの丹波篠山地域の凄さっていうのをすごく感じました。もちろん学生ならではの甘さというか、そういうのもありますし、学生ならではの無鉄砲さ、そういうところもあると思うんですけど、そういうのをしっかりとやらせてもらって、そういう経験をした人たちがこういう交流会に集まって、ワイワイ、ガヤガヤとセッションができる。篠山丹波に大学が無いという話をされていましたが、そうではなくて、ある意味「これこそが、大学なんだ」と。僕はそういうことをすごく思いました。まさに「地域大学」。これだけの大学の知恵と若さと経験というのが集まって、そして地域の方々からも教わる。みんなが教わり合って成長していく。こんなすごい場があるということに非常に感動していて、今年から初めてこちらの地域に来させてもらってるんですけど、こういうことができていく丹波篠山のすばらしさというのを是非もっともっと発展させてほしいなと思います。本当にそういう大学連携の大学をここにそういう地域講座というのを開いて単位ができていく、というようなシステムなんかもできれば本当に素晴らしいことになるだろうと感じております。

学生の皆さんも先ほどおっしゃっていましたが、やっぱり大きな問題っていうのは高齢者の方や年配の方が多くて過疎化することについて、我々や学生が見つめておかなければいけないのはあと20年後、30年後ということになります。いまの高齢化というのは20年後どうなっているのか。そこに解決がいくようにいろんな活動が、地域の魅力を再発見・再発信して行って、そしてそこにいろんな若い人が集う。そして20年30年後がすごいことになっているというような、そういう原動力にここにいる人達がなってくればなと本当に思います。

今日はみなさん、どうもありがとうございました。



## 県立柏原高等学校 村井 俊之 教諭

柏原高校の村井です。今日は学生の地域貢献ということでグループワークを見ていたんですけど、本当に学生諸君からすごく良い意見が出ているなって思うんですよ。

「若い力こそが労働力だ」と。もうほとんど核心をつくような答えだったなと思うんですよ。それを見て、僕は歴史の先生なんですけど、1860年の明治維新とか第二次世界大戦の後の戦後の復興とか、そういうのを見てて共通点は若い子が帰って来たんですよ。若い人々が、10代20代の子が地域の最前線を引っ張ってきて国を変えてきた。そういう事実がある。

なぜそういう若い子が引っ張れるのか。やっぱり「熱意」ですよ。人っていうのは説明とか理論じゃなくて気持ちについて行くんですよ。やっぱり結果出している人間もそうなんですけど大事なのは、がむしゃらにがんばっている人間について行くっていうのは人間の本質だと思います。そういうのを見ていて非常に今日は、日本社会に求められているパワーとかエナジーっていうのが非常に集まった日じゃないのかなという感じがします。だからこそそういう気持ちがあるなら突き進んで行って欲しい。夢や希望があるなら必死に努力して欲しいと思います。

逆に大人の人達はそういう若い子の努力とか夢をバックアップできる、そういう日本社会にしていけば、丹波篠山じゃなくて国際社会、TPPとか食料自給率とか大変問題はありますけれど、そういうのに打ち勝っていける日本になるんじゃないかなと。今日はその第一歩になれたんじゃないかなと考えております。



## 県立篠山鳳鳴高等学校 有田 きみ 教諭

篠山鳳鳴高校の有田と申します。今日はインターアクト部というボランティアの活動をする子たちを引率して参りました。今日は今からですね、高校教員としての目線での感想と今日のテーマに関することについて、最後は個人的な素朴な疑問をちょっと聞きたいなと思っています。ただ、一番最後に聞こうと思っていた素朴な疑問というのを先にお聞かせください。

本当は大学生のみなさんに聞きたいんですけど、こうして地域、田舎に関わってくださるここにいる大学生の中で、私の地元も篠山や丹波みたいな田舎だという人はどれくらいいますか。9人くらいですね。やっぱり田舎の人は少ないですね。どれくらい都会の人でどれくらい田舎の人なのかなというのが聞きたかった個人的な質問です。

では高校教員としての目線なんですけども、私が顧問をしておりますインターアクトクラブは地域貢献や社会貢献というのを目指した活動を展開したいなと思って、私はいつも活動をしています。いかに高校生が能動的に自分達で考えて地域のためになって動けるかというのを考えています。本当にたくさんの依頼が篠山市や村井先生から、「このイベント出してくれ」、「このイベント出してくれ」と、高校生をなんだと思っているんだ、という感じで、ただの労働力として高校生を求められることが多いんです。そうじゃなくて高校生にメリットのある活動を展開したいなと思って、清野さんとも4年ほど前からお世話になっております。

ここにおられる大学生の皆さんの発表を聞いていると、本当に能動的に自分から活動しておられるように聞こえたので、こういう活動を高校生にもさせたいと本当に思います。まだ高校生はどうしても少し幼いですし、受験勉強も大変なんです。単語テストも毎週やっています。私は英語の先生なんですけど。なので本当に大学生の皆さんは今こそ、そういう活動ができる良い時期だと思いますので、是非思う存分やっただけたらと思います。

今日のテーマについてなんですけども、私が感じる皆さん大学生の皆さんがこういう地域に関わる人間っていうのは、先ほどお話もありましたけれど、大学生、暇ですよ。大学生の活動っていうのは利益とか結果っていうのを必ずしも求



められていないと思います。こんなに非生産的な活動をこんなに一生懸命できるのは大学生だけだと思います。高校生ではちょっとまだ自分たちだけではなかなかできないので、本当にメリットっていうのはそういうところかなと思います。皆さんがただただ楽しいっていうその思いが地域のために絶対になっていますので、このままただただ楽しいっていう活動を続けていただきたいなと思います。先ほどの先生もそこに結果を求めてくださいねとはおっしゃっていましたが、私も地元出身なんですけど、本当に大学生の皆さんがただただ楽しい活動をしていただくことが地域のためにもなっていて、私が高校生の活動に求めている、活動する側もされる側もどちらもメリットがあるという関係になっていると思いますので、これからも精一杯楽しさを追求して活動してってください。

それから皆さん篠山や丹波で関わられるのはどうしても年配の方が多いのかなと思います。中には小さな赤ちゃんや小学生とつという活動もあったと思います。どうしても高校生は本当に忙しいので、高校生と関わってくださいっていうのも、高校サイドが忙しいのでなかなか難しいんですけど、どうしても私としては高校生と関わってもらいたいなという気持ちがあります。皆さん大学生が地域と関わってくださる高校側のメリットとしてはですね、やはり高校生は地元のことをそんなに好きじゃないとか田舎だしと思ってるんです。なので、私たちの地元はそんなにすごいのかな。都会の大学生がお金出して毎週帰ってくるぐらい良いところなのという高校生に伝わる良いメッセージがあると思いますので、是非高校生と関わってください。そして篠山や丹波は少子化ということもありますので、是非関わっていただいた高校生と恋愛してください。今日は高校生の参加者は少ないですけど、なかなか大学生の女の子が高校生の男の子を見て好きになることは無いと思うんですけど、高校生だったらこの高校生かわいいなって娘が一杯いると思います。メール交換して帰ってください。そして大学4年間だけの活動っていうことで終わってしまわずに、篠山の女の子と結婚して篠山に住んでいただいて、子供を作って柏原高校と鳳鳴高校に入れてください。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

## 関西学院大学総合政策学部 客野 尚志 教授

本当にみなさま、先生方を含めて地域の方、さまざまな方にご協力いただき本当にありがとうございました。おかげさまでもう4時間になりますけれど、さまざまな議論もあつという間に過ぎてしまひまして、いろんなヒントを得られたんじゃないかなと思うし、私自身もこうやって皆さんと一緒に集まっただいて、いろんなことを持ち帰っただけると思ひますので、そのことを本当に嬉しく思ひます。ありがとうございました。

1つだけこれは私が知り得る事例なんですけど、別に関学の自慢をしてるわけではなくて、多分皆さんのところでも同じようなことがあると思うんですけど、この地域で学ばせていただいた学生たちが自分達で団体を作ってよその地域でこういう地域づくり活動をやっているという事例が関学にはあります。多分、よその大学でもあると思うんですけど、それだけ丹波で学ばせていただいたことっていうのは大きくて、それがまた別の地域に波及してって、いい意味で地域活性化に繋がっていくということで。もしかしたら先ほど皆様方からいただいたご意見の答へに、ちょっとなっているのかなと思います。

それから反省点として毎年怒られているんですね。これは次回での反省につなげていきたいと思ひますのでお許しただければと思ひます。

今日は本当にどうもありがとうございました。

